

こども発達支援センターでは、令和3年度に開設10周年を記念して、発達支援講演会をオンライン開催しました。その内容の一部をご紹介します。

園や学校に「行けない」「行きたくない」大人たちはどうしたらいいのか？

独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

診療部長 精神科医師 成田 秀幸 先生

講演会の内容

- ① 園、学校にこどもたちはなぜ行き続けるのか
- ② 「行けない」「行きたくない」の背景をどう考えるか
- ③ 大人たちはどうすればいいのか



不登校とは・・・病気や経済的な理由によらず、長期にわたって学校に行けないことも年度、または断続的に30日以上欠席したこどものこと

- 不登校は平成10年以降最多となっており、90日以上欠席した不登校児童が55.6%（令和元年度）を占める。
- 大事なことはこども本人が「行けない」「行きたくない」と感じていることに注目すること。不登校の背景は1人1人違うので、その背景について大人たちが考えていくことが重要。

① 園、学校にこどもたちはなぜ行き続けるのか

こどもの心理社会的な発達段階・状況と園や学校の環境側の性質・機能とがマッチしていて、こどもにとっての安心・安全、自分の価値を感じる機会が保障されることで、園や学校が『心理的居場所』として機能し、「学校に行く」という行動を支えている。

② 「行けない」「行きたくない」の背景をどう考えるか

家族と過ごしていた場所から、同年代の集団にどのように参加していったのか、その子ならではのプロセスをあらためて辿り、そのプロセスを踏まえて背景について考える。つまり“原因探し”より『本人の文脈』で“物語”を辿ることが大切。

◎不登校の背景要因となりうるもの

- ・発達特性と環境のミスマッチによる不快・不安・自尊感情の傷つき
- ・本人の心理社会的発達経過と集団参加のタイミングや内容のミスマッチ
- ・学習困難、いじめ、こども同士の対人関係トラブルなど

発達特性としての感覚の偏り（音、におい等）やコミュニケーション困難への理解・支援の不足、具体的な見通しを持たないまま活動参加を強いられること、理解・支援不足による失敗体験や本人が理不尽に感じる叱られ体験等によるストレスの蓄積が、こども自身の許容範囲を超えてしまう。



③大人たちはどうすればよいのか

本人に“具体的に”寄り添う

- 本人の苦勞や努力を、本人の文脈で理解
- 本人の関心事を、本人の視点で理解しようと努める

多様性を“具体的”に保証する

- 大人側の基準・期待で選択肢を限定せず大人側が柔軟に考える
- 子どもの心理的な『つながり』、教育を受ける権利を保証する

主体性を尊重する保証する

- こうした方がいい等のアドバイスより、こういう選択肢もあるという「提案」を優先
- 学校や学習に関わるだけでなく、例えばおやつを何にするかなど、日常的なことでもこのことを意識する



発達と環境のギャップをうめる

- 特性にそった安心できる分かりやすい環境づくりや関わりの工夫
- 人への信頼感、成功体験等、その子が必要とする要点を保障する

家庭への支援

- 保護者も周りの大人と悩みを共有しづらく、仕事や生活の調整の大変さ、将来への不安など、孤立感を持ちながら抱えている場合も多い



“再登校”だけではない、本人の居場所となり得る様々な選択肢

教育センター（旧適応指導教室）、G—SKYPlan（群馬県青少年会館）、フリースクール、放課後等デイサービス、塾、家庭教師、ICT を活用した学習支援、習い事など・・・



◎保護者自身のメンタルヘルスも大切に

“喪失体験に対するグリーフワーク”を参考に…

- 1人になる時間を作る
- 信頼できる人に話を聞いてもらう
- できるだけ意識して休息を取る
- 自分の感情に気づいて、それを表現できる場所を確保する
- 関係者間で体験を共有し、語り合える場所を持つ
- 自分を労い大切にする
- 自分を責め続けない

最後に・・・

支援のあり方（文部科学省の通知より抜粋）

『学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す』
そのために大切なこと…

◎その子の発達特性、これまで感じてきた思いなど、関わる大人が共通理解をもつ

◎理解に沿った適切な提案、その子自ら歩みを進められるための「おぜん立て」

◎その子にとっての『心理的な居場所』を、途切れることなく保障していく